新たなる世界の片隅に

あらたなるせかいのかたすみに

佐倉羽織

Web Sample

「魔法の代償」編 4 the enchanter IV

“奇跡を望む権利”

Inspired from 魔法少女まどか☆マギカ

この pdf は、購入前の立ち読み用として該当書籍の中から一部抜粋して掲載しています。従いまして、ページ番号が飛んでいる部分についてはその間のページが省略されており、前後の話がつながっておりません。ご了承下さい。実際の頒布物はオフセット表紙こみ３６ページとなります。

なお、今回は特別にオリジナル魔法少女を描いた巻末短編については、全文掲載しております。

頒布予定：COMIC １☆６（2012 年４月３０日）

頒布予定価格：３００円

http://madokami.fairies.jp/

奇跡を望む権利

二人のお茶会

それはさやかが魔法少女契約をする前の週の出来事であった。

授業が終了した後、仁美はいつものようにほむらとさやかを誘おうと、ひとまず自分の席から距離のある、白板（はくばん）の前のほむらの席を見た。

しかし、仁美が気がついた時には、既にほむらは帰り支度を終えていた。視線に気がついたのか、教室の後ろの方を振り返る。

「ごめん！　仁美ちゃん、さやか、また明日ね！」

大きな声で挨拶をしつつ、もう体は出口に向かっている。

仁美にはそれはとても意外な行動に感じられた。

今まで、さやかや仁美が、いえ、主に仁美の用事でほむらの誘いを断る事はあった。もちろん、ほむらもこの三人以外に全くつきあいが無いわけではないから、今日はそっちに行くね、と断られる事は無いわけではなかった。

だが未だかつて、ほむらが一人でいそいそと帰ってしまうのを仁美は見た事が無かった。一人になるのを極端に寂しがる娘が、自分から率先して一人で帰るなんて……。

だから、仁美はその姿を半分唖然（あぜん）として見送った。

「疾風（はやて）のように帰って行きましたね……」

さやかに同意を求める。

「先輩、時間に厳しいらしいからね」

さやかはそう答えた。先輩？　誰だろう。部活をやっているわけではないはずなのだけど。

ただ、ほむらは変わってしまったという事、それは事実だ。仁美はそれがなんだか寂しくなった。自然と頬（ほほ）に右手を添えて、ため息を吐（つ）く。この間見た芝居の台詞（せりふ）のように、自分の気持ちがつぶやきとして現れる。

「最初のはかなさは失われて……でもそれは小動物系へのクラスチェンジですので、それはそれで愛くるしかったのですけれども」

さやかはまるで意味が分からないかのように、きょとんとしている。

「ついにか細さも失われてしまうとは……かくも世は移ろいやすい物ですのね」

さやかはここまで聞いて、あ！　という表情を作った。気持ちを感じ取ってくれたようだ。

「ははは、しょうがないよ。ヒトは変わらずにはいられない、

からさ」
　そう慰めてくれた。そうなのだ。きっとその成長はほむらにとってすばらしい事に違いない。彼女は「普通の少女」になりたがっていたのだから。だから、本当は応援すべきなのだと仁美も頭では分かっていた。だけれども、同い年なのに妹のように慕ってくれる、ほむらの純粋で、何をするのか分からない危うい心は、今まで何もかもが用意された中で生きてきた仁美にとってあこがれであり、人の感情は論理では割り切れないという、その気持ちを埋める、欠片（置きとされた部分）でもあったのだ。だから、教科書通りに納得するのではなくて、わたくしもちゃんとボヤいていいのだと思った。だって、隣にはいつも支えてくれるさやかさんが今も寄り添ってくれているのだから。
「ここのところ、一緒にお茶にも行っていませんし、人生の楽しみがまた失われましたわ」
　人生の楽しみとは、ちょっと大げさかな、と思いつつ、でも何かが物足りない状態を表すのにはぴったりの言葉だと思った。
　その時、さやかはたぶんわざと明るめの声を出してくれて、仁美を誘ってくれた。
「んー、じゃあ久しぶりに二人でどこかへ寄る？」
　たぶん彼女は、軽い気持ちで誘っているのだと言う事は察しが付いた。そもそも、別に絶対三人で出かけなくても良いはずだ。ほむらが転校してくる前は、二人で出かけてたのだから……。
　だが、その誘いを聞いた時、仁美は突然別の事を考えた。
　この間、ほむらと二人きりになった時、思わず聞いてしまったあの質問。あれからずっと、自分の質問とほむらの答えを反芻（はんすう）していた。だからこれは、さやかの意思確認をするチャンスなのではないのだろうか。
　仁美は少し考えて、さやかの方へ向き直り、
「……そうですね」
　と答えた。そして、しばらく躊躇（ちゅうちょ）した後、独り言のように補足した。
「こういう機会に、二人でしか出来ない話をするべきかも知れません」
　もし流れが、そちらに向けば、ではあるけれど。でも、これからも二人が友達でいるためには、その件はいずれはっきりさせないといけない事だと、仁美は思っていた。自分が応援するにせよ、されるにせよ……。
　そんな仁美の思いを知ってか知らずか、さやかは楽しそうにどこに寄ろうかを考えているようだった。

＊＊＊

　ひとまずいつものショッピングモールにきた二人だったが、予定していた大人気のカフェは、あいにく満席だった。
　がっくりしたさやかに、仁美はカフェがあるフロアの二つ上

にある、大きさはそれほどでもなく、値段もちょっと高めだけれど、そのかわりあまり混んではいないカフェスタイルの甘味屋はどうでしょう、と勧めた。さやかはたまには和風な雰囲気の所もいいかなあと、思い直して了承した。

二人が店員に案内されたのは、テーブルスタイルの席で、茶箱風の机にガラスの天板が載せてある、窓際だけどちょっと奥まった席であった。二人はメニューを眺めながら、決めかかっては目移りをしつつ、しばらく何を頼むか悩んでいた。

結局、仁美は抹茶とほうじ茶の両盛りのパフェ、さやかは抹茶パフェに期間限定の雪だるま型ウェハースとか、粉雪に見せた固めのゼラチントッピングが追加された「細雪（ささめゆき）パフェ」を注文した。

しばらく二人は、とりとめも無い話をしながら、お互いのパフェを食べ比べたりと、いつも通りのお茶会が続いた。

パフェを食べ終わり、後出しの煎茶と、抹茶ミルクが届く。話題は自然とほむらの話になっていった。

「本当に二人っきりで寄り道するのは久しぶりですね……」

さやかものんびりした気持ちで答える。

「だね。すっかりわたし達、ほむらを中心に回っているよね」

「出会って一ヶ月もたってないのに……不思議な魅力ですよね、彼女」

「ただ危なっかしいだけの娘じゃないからだろうね。奥底に何か強い物を秘めていると言うか……」

最初はさやかが、あの子は放っておけないから。そう言って仲間に呼んだ。それは事実だ。でも彼女自身の純粋さとひたむきさ、それから、不思議と感じさせる芯の太さに、本当に引かれて、すごく好きになって行ったのは二人とも一緒だ。

今日だって、二人ともなんだか物足りない。あ、白玉、ほむらが大好きだったなとか、抹茶ミルクなんて、ほむらさんとシェアしなかったら飲んだりしなかったろうなとか、そんな事を思い浮かべている。

「なんだか、二人でお茶をしに来ているのに、ほむらさんの話題ばっかりですね」

「ははは、そうだね」

仁美はそんな余興のような前話をしながら、あの話を今するべきかどうか、迷っていた。だが、まずは話題を振ってみて、さやかの反応を見よう。もしさやかがきちんと向き合ってくれるのであれば、自分の心は打ち明けた上で、応戦することだって出来るのかも知れない、そこまでは決心がついた。

「そういえば……」

と仁美は話を振り始めた。だが、まだ迷いが出てしまってい

るような気がして、一呼吸入れた。さやかは、何を言われるのかは見当が付かなかったけれども、仁美の真剣さを見て、身構えた。

「さやかさん、上条君の事をどう思っているんですか？」

さやかは、質問自体の内容ではなく、何故それを今、仁美が問うているのか、その真意を測りかねていた。だから、その質問には答えなかった。仁美は続けた。

「さやかさん、上条君とはきちんと会ってるんですか？」

そう聞く仁美のその言葉は、さやかを動揺させた。

「……ううん。この間のコンサートの日も結局楽屋には顔を出さなかったし、その後もなんだかんだで……」

忙しくて会えない。のでは決して無い。むしろさやかが結果として彼を避けていた。それはまるでシュレディンガーの猫のように。結果を告げられるまで、答えはＹＥＳとＮＯの狭間（はざま）でどちらでもない混然一体とした状況を持てるからだ。

だが、仁美はさらに問う。

「もしかして、わたくしが、あのＣＤをお譲りしてから会っていないのですか？」

あのＣＤ。恭介が探していたクラシックのレアＣＤ。ショッピングモールのショップでは手に入らなくて、大沢台にある、店主が趣味でやっているような、小さな小さなお店で、仁美が偶然見つけてきてくれた、あのＣＤ。

「……そのまさか。わたしがほむらの相手に忙しいのもあるけど、結局なんだかんだすれ違いなんだよね、わたし達……」

もちろんそれは嘘。あのＣＤだって、さやかと恭介が会って話をするきっかけを作るため、わざわざ探してくれた――もしかしたら取り寄せてくれたのかもしれない――のに、さやかは恭介の家の前で、まるで手作りお菓子をお裾分けするような感覚で、照れながら渡しただけなのだ。兄妹かと思うぐらいに近くにいた人を、ある日異性と意識した時から、さやかは置きたくもない距離を置かずにはいられない、そんなジレンマの中にいたのだ。

表面上はいつものように明るく、茶化し気味に答えるさやかの姿を見て、仁美はもう心を抑える事が出来なくなっていた。

「わかりました。きちんと聞き直しますわ」

静かに目を閉じて。おもむろにぱっと目を開け、顔を寄せる。

「さやかさん、本当の所はどうなんですか？」

「何が？」

さやかは、何を聞かれているかは分かっているのに、それを理解したくないように問い返す。

「さやかさんは、本当は恭介さんが好きなんじゃないです

か？」

ついに言い逃れの出来ない質問。ＹＥＳ　ｏｒ　ＮＯ。わたしは今ここで、それを自分の口から明らかにしないといけないのだろうか……。

だが、さやかはまだ一つ、とても強力な切り札を温存していた。

「……そう言う仁美はどうなのさ……」

ゆっくりと、静かに、しかし、強い意志を持った言葉で返す。

「え？」

とっさに聞き返す。

「仁美も好きなんでしょ？　恭介……」

さやかは知っていたんだ……。仁美は予想外に帰ってきた質問に、今度は自分がどう答えるべきなのかを悩まざるを得なかった。仁美は先日ほむらに、心理テストを装って助言を求めた時、その時に思わず吐露した台詞通り、さやかが友達として大好きで大切で、決して失いたくないと思っている。ほむらは本当の友達なら、きちんと話し合えば分かって貰えるのではないか、そう言っていた。でも世の中はそんなに単純じゃない。それは前の学校で嫌と言うほど味わっているではないか。

「……」

即答出来ない仁美の言葉をさやかはしばらく待った。彼女だって本当はこんな事言いたくはないのだ。だがもう後には引けない。視線を仁美からその右奥の松の木を模したオブジェに逃がして続ける。

「違うの？　じゃあ、わたしが恭介に渡すって分かりきっているあのＣＤに、メッセージカードを差し込んでおいたりしたのは何故？」

仁美は頭を垂れた。あのカードは、ほむらの助言を受けて、最初に起こした行動だった。もちろんＣＤはそれ以前に手配していた物だ。だから、それをチャンスと思っていたわけでも、さやかを出し抜こうと思っていたわけでもない。

それに、カードには名前も書かず、ほんの二行ほどの励ましのメッセージを添えただけ。しかも、出来ればさやかに気づいてもらって、抜き取って欲しい。そんな思いで、全体はラッピングされているとはいえ、そのラッピングをあけさえすればすぐに分かる位置に、ブックレットとケースの間の見る位置にカードを挿入していたのだ。だからこそ、あのメッセージの存在をさやかが知っている事は、ごく自然であるはずだ。

それにもかかわらず、仁美が今狼狽しているのは、そのカードが、彼に自分の存在を知って欲しい、そう言う思いがあふれた結果だったという事は否定出来ないからだ。

だって、カードに使う紙の色も、メッセージに添えたスタンプも、真ん中に押した花束のエンボスも、悩みに悩んで、いくつも作った物から選んで、大好きな文香をしみこませて差し込んだのだから。それは事実だし否定出来ないから。

仁美は心を決めた、でも、この件でほむらを巻き込む事だけは絶対にしたくないと思った。だから、ぼやけた表現になったとしても、それでも精一杯の誠意を込めて答えた。
「……ある人に。……好きな気持ちを隠してずっと寄り添っているだけなんてつらい事だと言われたのです。でもその方に言われる前から、わたくしもそう思っていました。だから助言は、たしかにあったけれども、それはきっかけにすぎないんです。……わたくしは、あのCDにメッセージカードを添える事にしました……。でも。これだけは信じてください。さやかさんも大切な、とても大好きなお友達。わたくしには失いたくない人。だから……」
言い終わる前にさやかが反論する。
「ずるいよ。ずるいよ仁美……」
それは、彼女が、即座には自身を否定出来ないような言い訳を言ってきた事でも、内緒でメッセージカードを添えた事に対して向けられた物でもなかった。
ある人なんて、ほむらとしか考えられないじゃない。わたしはまだ、ほむらに恋の相談なんて出来ていないのに、仁美はもうそんなにも重要な決断に意見をもらえている。
「仁美はそうやって、わたしからいろいろな物を持って行ってしまうの？」
「そんな……そんなつもりは……」
抑揚の無い、刃のようなさやかの言葉に仁美はたじろいだ。
でも、もうこの事態は止められなかった。自分に出来る事は、ほむらの言っていたように、誠意を見せる事だけだ、そう仁美は思った。
だから、もう迷わないと決心をした。あえてきつい表情を作って言う。
「さやかさん。わたくしは決心しました。あなたはどうですか？　あなた自身の本当の気持ちと向き合えますか？」
さやかは答えない。
「わたくしは決心しました。でも、わたくしよりも上条君を長く、より近くで見つめていたさやかさんは、先に行動を起こす権利があるべきです」
「行動を起こす、権利……」
さやかは、驚いて、だが弱々しく復唱する。
「わたくしはさやかさんが、上条君に心を伝えるまで待ちます。でも、あなたが。あなたが、もし何も行動を起こさないのであれば……わたくしが行動します」
さやかはその言葉を聞いて、慌てて仁美に視線を合わす。
「待ってよ！　そんなの急に言われても、わたしどうにも出来ないよ！」
「では」
仁美は一端言葉を区切った。
「わたくしは、どのくらいお待ちすればいいですか？」

即座に問う仁美の、その言葉が頭の中でぐるぐるする。でもどれぐらいあったら決心出来るかなんて、そんな事分かっていたらもう行動しているはずなのだ。仁美がそんなさやかの気持ちを分からないとは思えない。

では何故、何故それを聞くの？　わたしはなんて答えるの？仁美の気持ちなんて理解したくない、もしそう思おうとしても、仁美が真摯(しんし)に向き合ってくれているのは認めざるを得ない。

一生待って。もしわたしの気持ちがどちらかに決まっても決して行動しないで。そんな事は間違っても言え無い。だって、わたしにだって仁美は大切なお友達だから……。彼女の気持ちも大切だから。

「……一週間……」

答えたのは何の根拠も無い数字。

「分かりました。その間はわたくし、この件に関しては何もいたしませんので」

そう言うと仁美は荷物を持って席を立つ。

「すみません。今日はこれで失礼します」

そう言い残して店を出ていく仁美の姿が、だんだん涙にかすんで行くのを、さやかは拭いもせずにただ眺めていた。

＊＊＊

「……ごめんなさい、ほむらさん。わたくしはやはり駄目でした……」

仁美は店を出てすぐ横の物陰で声を殺して泣いた。

「でも、もう戻れないんです。……戻れないんです、もう」

慰めてわたしを

結局さやかはその日、夕食もあまり食べられずに、制服のままでベッドに倒れ込み、長い間天井を眺めていた。

ＰＣから、チャットルームのエントリー音がした。もう、ほむらと約束している時間なのか……さやかはそう思った。

でも今の心理状態で、果たして自分はほむらを励ます事が出来るのだろうか。さやかはそれが怖かった。

どれぐらい時間がたったのだろう。このままではほむらを絶対に守ると誓ったあの言葉が嘘になってしまう。さやかはそう思った。

意を決してベッドから起き上がる。頬(ほほ)を軽くたたき、表情を作って机に向かった。

＊＊＊

チャットウィンドウを大きく広げる。そこにはちょっとむくれたように見えるほむらの顔があった。

「ごめーん、仁美とお茶してきたら遅くなっちゃってさー」

ある魔法少女達の日常

それは、その日のノルマをこなして、そろそろ帰ろうかと相談していた時だった。

『ロッテ、見える？』

私（エミリー）はテレパシーで聞いてみた。

『見えるわ。丸見え』

あれが見えない訳がない。

『じゃあ、しょうがないね』

『ええ、しょうがないわね』

二人の結論が決まると、ロッテは大げさにため息をついた。

顔はにやけてたと思うけどね……いつもの様に。

＊＊＊

ゆっくりと進む魔獣の前を、しずしずとロッテが横切る。

彼女の魔法少女服は……スリットの入ったシスター服風の、まあ、あれです。ジャパニメーション・ゲームとかの僧侶♀っていうやつ？　あんな感じ。

魔獣は自分の進路を邪魔されて咆哮（ほうこう）を上げる。

すると、すっとベールをかき分け、まるで今まで魔獣の存在に気がつかなかったかのように、ロッテは言った。

「あら、ごめんあそばせ」

涼しい顔をして、優しい声で。

次の瞬間、

「ウオォォォォォォォォリャーアァ」

と、普段のおとなしいお嬢様姿からは想像できないような激しい雄叫（おたけ）びを上げて、右手にひっつかんだハンマーを振り回し、ロッテは魔獣を打撃した。

今まさに魔光を放とうとしていた敵の両腕は順番に粉砕された。そして、その鈍くゆがんだ打撃音を聞いて、私は自分の出番が来たと判断した。

私は大きな黒いボンネットをかぶり、黒いクラシカルなドレスを身にまとって、魔獣の横にそびえ立つ、廃ビルの上で、縁を背にして待っていた。

そして、打撃音（登場の合図）とタイミングを合わせて、ビルから短く跳躍して身を投げた。高飛び込みをするように、身をひねり、落下

しながら体勢を整える。魔獣の頭上まで落下した後は、腰から片刃の東洋刀を抜いて、彼を頭からひと思いに切った。
膝を折って着地の衝撃を和らげ、しばし後、ゆっくりと立ち上がる。サムライ映画のように東洋刀を宙に振り、鞘に収める。
すると魔獣は裂けながら消滅していくのだ。四角い結晶体を残して。

ロッテは、ハンマーを魔導書に変化させると、左手を添え、静かに目を閉じて弔辞を述べた。
「汝、今、ここより希望の地へ帰り、安息を得ん事を祈る」

＊＊＊

「ただいまー」
私達はサンドラおばさんのお店に戻ってきた。
「おお、お帰り。首尾はどうだい？」
カウンターの奥で注文も聞かずにレモネードとコーラを用意始めたおばさんが聞く。
「上々、と言いたいけどね」
ロッテはポシェットから小瓶を取り出しながらぼやく。そして瓶を軽く振る。
軽い音を立てて、小さなキューブ二つと、一つの大きなキューブが瓶の中を舞った。

それを聞いて、ちょっと微笑んだおばさんは、レモネードとコーラをカウンターに置いた。
そこが私達の指定席のサイン。レモネードの前に私、コーラの前にロッテ。
おばさんはカウンターに肘をついて、
「奥に行くかい？」
と聞いた。
私は、
「やめとく。もうすぐキャロル帰ってくるだろうし」
そう言って断った。
それにしても、このお店、魔法少女以外のお客を見た事がない。なんでなんだろうね、こんなに美味しいのになあ、ドーナッツ……。
まあ、その方が、堂々と魔法少女としての会話が出来るから、私たちにとって、都合がいいと言えばいいんだけどね。

＊＊＊

「はぁ。このペースじゃそのうち干上がっちゃうわね……」
ロッテのぼやきはもっともだ。幸い私達は、得物で戦う、つまりは物理攻撃中心の、魔力の消耗の少ないタイプの魔法少女だからまだ回っているけど、これが中距離とか遠距離で、魔力

を飛ばすタイプの娘だったらどうなってた事か……。
「なんでこう、どいつもこいつも純度が低いんだろうねえ」
「その件に関しては、まだまだ見立てが甘いのと、実力がなくて深部に踏み込めないのが原因。ってわかってるんだけどね」
「たまにボーナスがあるようだから、収支はトントンでもよいのではないか、当面は」
左下の方からキャロルの声が割り込んだ。
横を向くと、カウンターチェアに寄りかかってキャロルがこちらを見ていた。
「あら、お帰りキャロル。すぐ帰る？」
私の質問に、キャロルはＹＥＳと答えた。
私は少し残ったレモネードを急いで飲むと代金をカウンターに置いて、チェアを飛び降りた。
その時、ロッテが声をかけてきた。
「あ、エミリー、帰る前に相談があるんだけど？」
「？　何？」

＊＊＊

「シャーロット・コンスタブルです。以後お見知り置きを」
ロッテは優雅な手つきで制服の裾を少し持ち上げ、ご挨拶のポーズを取った。ウチのママの前で。
「あらあら、ご丁寧に。エミリーのお友達なら、誰でもいつでもウェルカムですよ」
ママ、ロッテの仰々しい挨拶を受けて、その挨拶はフランクすぎる気が。ママ自身、良家の出だから作法は知っているはずなんだけど……。あ、今日はお店、臨戦態勢だったからパンツか。裾ないや、ママの服に。
「パパー、パァパァー、エミリーのお友達がお見えですよ！」
いやママ、別に婚約相手を連れてきた訳じゃないんですけど……。パパ今予防接種の準備で忙しいんじゃ……。
『だからさ、めんどくさいって言っておいたの、理解してもらえた？』
『まあ、パーティーの時の挨拶合戦に比べたらこんなのどうって事ないです。心がこもっていて……形式的じゃないから、とてもうれしいわ』
『そんなもんですか。まあ、どんなお友達でも、初めて連れてくる度にこの儀式だからねぇ』
『あら、逆に特別扱いされずにみなさんと平等にしてもらえるの。とても素敵だわ。そう言うのあんまり体験できないから』
『そっか。お嬢様故の悩みね』
『そう言う事』
そうこうしている間にパパが顔を出す。
「いやぁ、いらっしゃい。なんだ、すごく美人さんだな。エミリーも隅に置けないね」
いやだから、婚約者を連れてきた訳では……。

「シャーロット・コンスタブルです。以後お見知り置きを」
シャーロットの挨拶に、パパはきちんと姿勢を正すと、執事のようにきれいにお辞儀をしながら、
「医学博士、兼、獣医学博士のロイ・ブレイクです」
ときちんとした挨拶をした。と思ったら、一転して超フランクに、人なつっこい笑顔で親指を立て、幸運のポーズを向けると、
「よろしくな、ロッテ！」
……、いや、娘だから我慢してあげるけど、超恥ずかしいんだけど……って、ロッテ、頬赤い、赤いよ、目つき怪しいよ！こういうのいいの？　好みなの？　いや、まあ、パパ、超美形から進化したナイスミドルだけど……。
『エミリー、これ、テイクアウトで一つください』
『申し訳ございません、こちらは非売品でして』
『あら、残念』
今本気で残念がりましたね、お嬢様……。

＊＊＊

「ごめんなさいね、まだお店が終わってなくて。今日はまだ三件もトリミングの予約も入っているの」
自家製レモネードと、簡単な焼き菓子をテーブルに置いて、ママはいそいそとお店に戻ろうとした。
「え？　じゃあ私手伝わなきゃ！」
まあ、お手伝いと言っても、刈った毛を集めたり、ベッドの準備をしたり、道具をそろえたり……なんだけど。でもそれがないだけで結構大変だと思う。これは自慢でも何でもないんだけど。
「あら、エミリーはお客さんのお相手をしなきゃ、ね」
ママは優しくそう言って、ウィンクした。
「ロッテちゃんも、ゆっくりしていってね。もしよかったらご飯も食べていってね」
ロッテは「はい、ありがとうございます」と声をかけて軽くお辞儀をした。

＊＊＊

「いいお母様、お父様ね」
ロッテは静かに言った。私は。私は、
「だって、これが私の望みだから。ずっとあこがれていた夢だから」
そう答えていた。ロッテには嘘をつく意味なんてないと思ったから。ううん、ロッテには本当の事を知っていてほしかったから。
「そう。そうなのね……それでは、必死で守らないといけませんね」

そう言って、二人だけの時にしか見せない、ニカァっとした顔でロッテは笑った。

＊＊＊

夜、一緒に食卓を囲んで、楽しい時間を過ごした後、ロッテは自分の家に帰る時間になった。私は途中まで送って行くことにした。

「今度はロッテの家に行きたいなあ……」

そう言ってロッテを見た。彼女は微妙な顔をしている。

「うーん……ウチくる前に練習がいりますよ？」

ああ、礼儀作法とかそう言うの、かな？

「いえいえ、こなして見せますって」

「あんまりおもしろくもないと思うけれど」

予想通りの答えが返ってきた。でも、

「でもいいの。だって等価交換でしょ？」

私はウィンクをしながら返す。そう、等価交換。私達はあれからいつでも何でも分け合ってきた。ロッテはちょっと考えた後、微笑んで言った。

「……ふふ。そうね。まあ、お母様はともかく、お父様は変わり者が好きだから、気が合うかもしれないしね」

「そうかぁ……ってちょっと、変わり者って言うな！」

本気で失礼だな、二人だけだと！

私はちょっとむくれて頬を膨らませた。その様子を見てロッテは笑い出した。最初は上品に、最後は子供らしく。

「ふふふ、ははは」

こちらもつられて笑う。豪快に笑う。

「ははは」

二人は笑った。いっぱい笑った。そして一通り笑った後、ロッテは力強く言った。

「絶対。絶対に私達は円環の理になんか導かれない」

「うん」

答えた私に、ロッテは右手を差し出す。

「これは二人の約束。よろしいですか？」

その手を握り替えして誓う。

「そうだね、二人の約束。絶対守る約束」

その日も月がきれいに出ていた。

新たなる世界の片隅に

あらたなるせかいのかたすみに

魔法少女まどか☆マギカ
二次創作短編連作

「魔法の代償」編　（全5巻）

「暁美ほむらです。よろしくお願いします」――病室で純粋培養されたヒヨコのような少女が、見滝原市で大切な人たちに出会い、守られ、裏切られ、そして絆を強く結ぶ。ほむらは、自らが何を望んで契約したのかのかも覚えていない。強大な力を秘めた魔法少女である彼女を先輩達と親友が支え、共に進んでいく。その先に希望があると信じて。魔法少女まどか☆マギカ12話で提示された「円環の理世界」を公式・準公式設定等に準拠し、再構築した短編連作シリーズ「新たなる世界の片隅に」その第一弾「魔法の代償」編発刊。

ENGAGEMENT！

佐倉羽織　著

発売中

魔法少女とその弟子

佐倉羽織　著

発売中

すれちがう感情。大切な人たちの間でほむらは心を痛める。絶望的な状況の中、守られる自分から守る自分への道を一歩踏み出す為、ほむらの秘められた力が解放される。「魔法の代償」第二巻。

奇跡を望む権利

佐倉羽織　著

一〇一二年四月三〇日発売予定

巴マミの厳しい修行の元、魔法少女として、力を制御する方法を身につけた暁美ほむら。だが、時間は彼女が成長するのを待っていてはくれなかった。ほむらを支える美樹さやかの決断とは？

守護者の代償

佐倉羽織　著

一〇一二年五月三日発売予定

たった一つの奇跡と引き替えに魔法少女となる事を選んだ美樹さやか。彼女も巴マミに弟子入りし、短期間で佐倉杏子に匹敵する実力を身につける。ほむらとさやかの半人前ペアが走り出した。

半人前ペアの称号を受けつつも、次々実績を上げていく、ほむらとさやか。そうしてその二人を見守る先輩魔法少女、マミと杏子。だが運命の針は、あの日のあの瞬間を目指して進んでいた。

新たなる世界の片隅に

あらたなるせかいのかたすみに

魔法少女まどか☆マギカ
二次創作短編連作

「友達の記憶」編　（全５巻）

「逝ってしまったわ……円環の理に導かれて」――美樹さやかがいなくなった世界。その世界になお残る彼女の魔力、その残り香をそれぞれ胸に秘め、暁美ほむら、巴マミ、佐倉杏子は一見たわいもない日常に身をゆだねる。それが儚いと分かっているが故に、永遠に続く事を祈りつつ。だが、やはりそれはかりそめの暮らしでしか無かった。魔法少女まどか☆マギカ12話で提示された「円環の理世界」を公式・準公式設定等に準拠し、再構築した短編連作シリーズ「新たなる世界の片隅に」その第二弾「友達の記憶」編発刊。

はっぴぃばーすでぃ

佐倉羽織　著

発売中

共同生活を始めた魔法少女三人。だがマミには気になる事があった。杏子は何か隠し事をしているのではないか？　ほむらと杏子のバイト先に向かったマミは……。「友達の記憶」第二巻。

たまにはコーヒーブレイクを

佐倉羽織　著

発売中

最近魔獣の反応が「賢く」なっているのを感じ取った魔法少女三人は、ファミレスで対策会議を始めるが、話題はどんどん脱線してあらぬ方向へ……。そこへ現れたキュゥべえの語った言葉は？

桜の記憶

佐倉羽織　著

一〇一二年八月一〇日発売予定

ワルプルギスの夜はこの世界でも出現した。それぞれの思いを込め、戦う魔法少女三人。しかし、あまりの戦力差に徐々に追い詰められていく。ほむらは禁じられた力を解放する事を決意する。

セブンシスターズ

佐倉羽織　著

一〇一二年八月一〇日発売予定

敵の強大な力の前に、魔法少女が一人また一人と円環の理に導かれ消えていく。杏子はマミとその守護者、ほむらに未来を託し、長い間、自ら禁じていた強力な魔法を発動する。シリーズ最終巻。